

ユング『タイプ論』とプラグマティズム

—「個人的方程式 (persönliche Gleichung)」としての諸類型—

小木曾 由佳

1. はじめに

分析心理学の祖ユング (Jung, Carl Gustav 1875-1961) について、現在普及している理解は、彼の晩年の語りをまとめた『自伝 (Erinnerungen, Träume, Gedanken)』に大きく依拠してきた。幼年期まで遡る彼自身の内的体験、フロイトとの蜜月と別れによる喪失、そこからの見事な復活と中年期以降の独自の理論構築。夢やヴィジョンなど数々のイメージに彩られ、ユングの肉声で語られた『自伝』は、ユング研究において重要な位置を占め、そしてまたほとんど無批判に享受されてきたといえる。

ところが近年、イギリスの心理学史家である S. シャムダサーニが、『自伝』に関する興味深い事実を明らかにしている [Shamdasani 1995]¹⁾。『自伝』成立の過程において、複数の人物の手により、いくつかの重要な箇所が編集・削除されていたというのである。それらはいずれも、ユングにとって大きな影響を与えた人物や事柄についての叙述であり、従来の「フロイト中心的 (Freudocentric)」[121] に理解されてきた彼の思想を再解釈するための、大きな手がかりを示している。

中でも特に注目したいのが、プラグマティズムの思想家ジェイムズ (James, William 1842-1910) への言及箇所である。シャムダサーニによれば、公刊判では削除されている箇所において、ユングはジェイムズとの「出会いについて記述し、ジェイムズに対する学問上の恩義を詳細に描き出そうと試みていた」。彼の人物とその哲学に向けての最大の賛辞が綴られていたというのである [122]。

確かにユングの他の著作に注目すると、全集中の論文のみならず、複数の講演や書簡等においても、ジェイムズの人物や自らの思想に対する影響についての言及が散見される。たとえば、論文「人間行動の心理学的要因」(1937) において、ユングは以下のように述べている。

「省略してはならない人物が一人だけいる。それは、ウィリアム・ジェイムズその人である。彼の心理学的なヴィジョンとプラグマティズムの哲学は、一度ならず私の導き役となってくれた。人間の心理学の地平が不可知の領域にまで広がっていると私に認識させたのは、彼の広範に渡った精神にほかならない。」[Jung 1967: § 262]

プラグマティズムといえば、19世紀末のアメリカに興った、現代思想の一大潮流をなす哲学である。この思考法においては、思想の意味や命題の真偽は生起した事象の成果によって決定され、実際の行動の結果において効果のあるものこそが、一定の真理とみなされる。そのように見るかぎり、プラグマティズムは「有用性」の観点を強調するものであり、夢やファンタ

ジーといった数量化も普遍化もしがたい事さらに基礎をおくユング派の心理療法にとって、あまりに縁遠いものにも見えはしないだろうか。にもかかわらず、その始祖の一人であるジェイムズという思想家を、ユングは「私の導き役」とまで称し、高く評価しているのである。

ユングが晩年の『自伝』製作にあたって、なおも「学問上の恩義」を感じていたというジェイムズの哲学と、ユング心理学はいかなる思想的連関を有するのか²⁾。この解明は、フロイトとの物語から一旦距離を置き、ユング独自の思想の生成場面に改めて目を向けるにあたって、重要な足場になると思われる。そこで本論では、ユング思想草創期におけるユングとジェイムズとの直接の接触について確認したのち、ユング初期の論考であるタイプ理論に注目し、そこにジェイムズのプラグマティズム哲学との連関を探ることにする。

2. ユングとジェイムズの接点と『プラグマティズム』

(1) 二人の会合

同時代を生きながら、大西洋を隔てた別々の大陸で名声をあげたユングとジェイムズであったが、彼らが直接の出会いを果たしたことがあった [Taylor 1980]。1909年9月7日、アメリカ・マサチューセッツ州のクラーク大学にて、大学創設20周年を記念した心理学会議が開催される。アメリカとヨーロッパから、心理学や精神医学、哲学、教育などの専門家や大学院生が多数集ったというこの機会に、ユングは学長のスタンリー・ホールによって、当時精神分析理論を発表したばかりのフロイトと共に招待を受ける。この地で、ユングとジェイムズは初めて出会うのである。それはユングが34歳、ジェイムズにとってはその最晩年にあたる、67歳の時の出来事であった。晩餐会の合間、一時間ほどの会合ではあったものの、彼らは心理学、特に当時ユングが関心を寄せていた超常現象の心理学について、熱心に意見を交し合ったという³⁾ [Jung 1972:158f]。

この会合の翌年、残念ながらジェイムズは不帰の客となり、この後の二人の間に直接の交流が叶うことはなかったが、彼らが互いの芳しい印象について、親しい人々に向かって所感を述べている記録が複数残されている⁴⁾。特にユングは、ジェイムズから受けた強烈なインパクトについて繰り返し語り、晩年の書簡では、この日のことを以下のように回想する。「私は彼のヨーロッパ的な教養と、偏見のない広い心に感嘆しました。彼の人格は際立っていたし、彼と交わす会話は本当に感じのよいものでした。[...] 私は彼の思い出を誇りに思い、つねに、彼が私に示した手本をできるかぎり思い返してきたのです」 [Jung 1973:194]。ジェイムズの人柄への印象を語るのみならず、その後の人生においてジェイムズが示した手本を「つねに」思い返したと述べるのである。

会合から3年後の1912年、再びアメリカの地に立ったユングは、フォーダム大学での講演において、出版から間もないジェイムズの『プラグマティズム (Pragmatism)』(1907)⁵⁾からの長い引用と共に、彼がこれを「自らの導きの糸として受け取った」と明言する [Jung 1961:110]。シャムダサーニの調査によれば、ユングの所蔵していた『プラグマティズム』には、至るところに膨大な量のアンダーラインが引かれていたという [Shamdasani 2003:61]。彼は『プラグマティズム』といかにして出会い、これを受け取ったのか。

(2) 『プラグマティズム』とタイプ理論の成立

1914年、ユングの論文「精神病の意味 (der Inhalt der Psychose)」に、以下のような記述が見られる。「私は、ウィリアム・ジェイムズがプラグマティズムに関する本のなかでおこなった、二つのタイプに関するすぐれた叙述を特に強調したい」[Jung 1960: § 212]。

そもそもこの論文は、ユングが1908年1月にチューリッヒ市庁舎で行った学術講演の講義録である。講演と同年に発行のフロイト編“Schriften zur angewandten Seelenkunde”シリーズの第3巻に収録され、6年後の1914年に、序文と補遺を加え、再び同出版社より出版される。上の引用は、この新たに追加された補遺中の一文であった。つまり、この二つの版を見比べると、初版には存在しなかった、ジェイムズやタイプに関する言及が、1914年版に新たに書き加えられていることになるのだ。よって、この6年間のあいだに、ユングがジェイムズの『プラグマティズム』に触れ、インパクトを受けたというのは想像するに難くない。また事実、前項にて引用したように、1912年にはすでに、ユングは講義においてこの本を取り上げている。少なくともこの年までに、何らかの形でジェイムズのプラグマティズム哲学に接していることは確かなのである。E. テイラーは、1913年から1917年の間に、ユングが多くの論文や講演でジェイムズを引用していることを指摘する [Taylor 1980:164]。

ここで注目すべきは、この数年間が、ユングとフロイトの出会いから別れの時期と見事に重なっている点である。彼らの最初の出会いは、1907年2月のウィーンでのことだった。1909年には、7ヵ月に渡って共にアメリカへ講演旅行に出かけるなど、二人の親交は師匠と弟子の関係性を優に越えるものとなっていたが、それからたった3年あまりで関係は呆気なく終わりを告げる。決定的なものとして、ユングがフロイト宛に訣別を告げる手紙を送るのは1913年1月だが、この前年までにはすでに別れの気配が濃厚に漂っていたという。フロイトとの個人的な関係を絶ったユングは、当時のことを振り返って、『自伝』において以下のように告白している。「フロイトとの別れの後、私にとって内的な不確実さ、つまり方向喪失の時期が始まった。私は完全に宙吊り状態にあると感じた。なぜなら、私は私自身の立脚点を未だ発見していなかったからである」[ER 174]。

このユングの「方向喪失」は、その後、第一次世界大戦を挟んで、実に約7年間にも及んだ。当時のユングは、学術的な本を一切読めなくなり、1905年以来続けてきた大学の講師の地位も捨て、ほとんど論文も書かなければ講演もせず、社会的なつながりは極度に少なくなっていた⁶⁾[197]。患者に対しても、「理論的な観点はすべて避け」、彼らが自分の夢や空想について語るままに任せるようにしたという。そうしたなか、ユングにとって「何らかの規準をもつ必要性、つまり、何らかの最初の方向づけのようなものの必要性が、だんだんと緊急なものとなってきた」[174=1.244f]。ここでユングは、「自身の立脚点」を一体どこに求めたというのだろうか。

ユングが長い沈黙を経て、再び著作活動を始めるようになったとき、その黎明を告げることとなった大著は、1921年の『タイプ論 (Psychologische Typen)』であった。P. ホーマンズは、これについて以下のように述べる。「驚くべきことに、この『精神的危機の』時期が過ぎ去ったとき、新しい思想、すなわちユング思想が中心を占めることになったのである。そしてその新しい体系の鍵となるのが、タイプの理論であった」[Homans 1979:82]。また、『タイプ論』の邦訳を行なった林は、タイプ研究がユングにとって「暗闇体験の原因を学問的に明らかにし、方法論的な立脚点を確立するのに役立った」[林 1998:35] と述べ、以下のように推定する。「お

そらくユングがこの時期にタイプ論の研究をおこなったのは、タイプ論的研究中に、いま自分が必要としている方法論の確立を可能にする何かがあることを、予感していたからではないであろうか」[林 1987:628]。ホーマンズや林が述べるように、ユングがタイプの研究を杖に自らの暗闇を探り、それを支えにもう一度立ち上がったのだとすれば、なぜ彼は特にタイプの理論を「方法論的な立脚点」に選んだのか。実は、「方向喪失」の最初期、ユングのとある講演が、すでに『タイプ論』の構築を準備していた。

ユングは、フロイトとの訣別の手紙から数ヵ月後の1913年9月、講演「心理的諸タイプの問題のために (Zur Frage der Psychologischen Typen)」(以下、「ZF」)にて、『タイプ論』の萌芽とも言うべき様々な重要概念を提示している。

ここでユングはまず、ヒステリー患者と統合失調症患者とに対比的に観察されるリビドーの流れを、それぞれ「外向 (Extraversion)」および「内向 (Introversion)」と定義する。しかしそれらは決して病理に限られたものではなく、「病理学の枠外にも」この二つのタイプを見ることができるとして、問題を人間一般に拡張することを試みるのである [ZF §863]。というのも、当時のユングは、自分自身とフロイトが関係を絶つより以前にすでに明るみに出ていた、A.アドラーとフロイトとの精神分析学会内での対立が、「精神病理学の内輪もめ以上のものを示している」と感じていた [ER 157]。すなわち、これを人間一般の性向としての「二つの心理的タイプ」の対立によって説明できるのではないかと考えたのである。

ユングは、これを根拠づけていくために、哲学や美学、言語学や精神医学など、さまざまな領域の思想家の議論を取り上げていく。ここで紹介されたのは、オストヴァルト、ヴォリンガー、ベルクソン、シラー、ニーチェ、フィンクら、1921年出版の『タイプ論』において各論として論じられることになる思想家たちである⁷⁾。しかし、こうした錚々たる顔ぶれの中で筆頭に挙げられたものこそ、ジェイムズの類型論にほかならない。「管見の限り、この観点による最も妥当な観察をおこなったのは、哲学者ウィリアム・ジェイムズである」として、『プラグマティズム』におけるジェイムズの分類を詳細に紹介していくのである [ZF §864-869]。ホーマンズによれば、「ここでユングは初めて、フロイトと少し距離をおくことができた」。ジェイムズの類型論に比較することによって自らの見解を支持し、そこにフロイトの存在を位置づけようとしたというのである [Homans 1979:81=1986:109]。

ここに見られるように、ユングのタイプ研究に、ジェイムズの『プラグマティズム』が大きな影響を及ぼしているのは確かである。そしてさらに、もし『タイプ論』が、ホーマンズの言うユングの思想体系の「鍵」[110]であるのだとすれば、ユング心理学の確立にとって、ジェイムズの存在が重要な役割を果たしていたこともまた示唆されるであろう。

1912年までに『プラグマティズム』に触れ、その思想に覚えた共感がユングの「方向喪失」期の道標となり、その後の分析心理学の確立を導いた。このように考えるかぎり、ユングがそのタイプ研究において『プラグマティズム』をいかに受容したのかという問いは、ユング心理学を再考するうえで重要な手がかりになると言える。そこで次節では、ジェイムズが『プラグマティズム』で展開した理論と、それを支える彼の類型論を確認したうえで、ユングがそれをいかに受容したかを、直接の言及箇所注目しつつ詳細に見ていくことにする。

3. 『タイプ論』による『プラグマティズム』の受容

(1) ジェイムズのプラグマティズム

プラグマティズムは、もとは論理学者パース（Peirce, Charles Sanders 1839-1914）が初めに用いた名称である。その思想は後に、ジェイムズやデューイ、ミードらによって引き継がれ、特に 20 世紀前半のアメリカを中心に目覚ましい興隆を遂げた。表立った流行が過ぎ去った今日でも、現象学や言語哲学などの源流には、なおもプラグマティズムの思想が息づいていると言われる。始祖の手を離れて瞬く間に展開していったプラグマティズムの思想はそれゆえに、基本旋律を保ちつつも、論者の立場や性質によって微妙な差異を生ずることになる。逆に言えば、その引き取られ方によって、思想家自身の独自性が露わとなろう。事実、ユング自身の記述の中にも、ジェイムズの思想と、他の思想家のプラグマティズムとの間に区別を設けようとする箇所が存在する⁸⁾。したがって、さしあたりここでの目的は、特に、ジェイムズという思想家を通して語られたプラグマティズムの外観を探るということになる。彼は、プラグマティズムの草創期に立ち会い、この思想を独自の文脈で噛み砕き、アメリカ全土に知らしめた張本人であった。

プラグマティズムは 1870 年代初頭、マサチューセッツ州ケンブリッジの小さな町で産声をあげたと言われる。ジェイムズ、パースらを含む若手の 6 名の学徒⁹⁾を中心に二週おきに集まっていた、ギリシャ哲学からイギリス経験論、当時最新のダーウィニズムまでを渉猟して語り合い、彼ら独自の思想を鍛錬していったのである。背景も立場も異なる彼らの根底に共通していたのは、人間の「思考」とは本質的に「行為」と結びついたものである、というテーゼであった。

1878 年、メンバーの一人であるパースが、その意見をまとめたものとして、論文「われわれの観念を明晰にする方法 (How to make our ideas clear)」を上梓する。当時の哲学界にとって画期的な宣言であったにもかかわらず、パースの知名度が高くなかったことや彼の晦渋な表現も相俟って、長い間、この思想はほとんど知られることはなかった。ところが、パースの論文からちょうど 20 年の月日がたった頃、プラグマティズムの思想は一気に脚光を浴びることとなる。その火付け役こそ、ジェイムズその人であった。彼は 1898 年 8 月、カリフォルニア大学の哲学会への講演¹⁰⁾において、友人パースの説として、プラグマティズムの格率を紹介したのである [James 1975:258]。すでに『心理学原理』(1891)で名声を博し、ハーバード大学哲学科の主任教授という知の最高峰にあったジェイムズの言葉は、人々の耳目を一斉に集めた。この講演が後に体系化された著書が、その名も『プラグマティズム』である。実は、パースからすれば、ジェイムズを通したプラグマティズムは、パース自身が構想したものとは大分隔たりがあったようである¹¹⁾。本論では、ユング心理学との比較検討のための基礎作業として、二人の違いの詳細は先行研究に譲ることとし¹²⁾、さしあたりジェイムズのプラグマティズム哲学がいかなるものであったかを概観することにしたい。ユング自身が愛読したという『プラグマティズム』(以下、『PR』)の内容を、次に見ていくことにする。

『PR』は、1906 年から 1907 年にかけて行われた一連の講義録¹³⁾である。第一講冒頭において、ジェイムズは次のように述べる。「私は紳士ならびに淑女諸君が皆めいめいなんらかの哲学をもっておられることを知っているし、また諸君についてももっとも興味深かつ重要なことは、諸君の哲学が諸君のそれぞれの世界におけるパースペクティブを規定してゆくその仕方であることも知っている」[PR 12=9]。様々な文化や背景をもつ人々がひしめき合うアメリカにあっ

て、「ひとつの原理によって統一する一元論ではなく、相互に違った価値観をみとめあう多元主義」[魚津 2006:13]こそ、最も切実に求められた思考法であった。ジェイムズのプラグマティズムは、こうした思想の根幹に位置づくものとされ、『PR』は、アメリカ哲学が独自の歩みを展開してゆく端緒を開いた記念碑的著作となるのである。では、『PR』においてジェイムズが示した革新的方法とはいかなるものであったか。ジェイムズによれば、「プラグマティズム」とは、哲学上の諸々の相対立する学説間の相違を調停する「母」である。「プラグマティズムはあたかも母なる自然のそのように、その態度において多面的にして柔軟であり、その資源において豊かにして無尽蔵であり、そのくだす結論において友好的なのである」[41=66]。プラグマティズムが調停者たりうるための前提として、第一にこの思想は、解答不能な形而上学的問いの前に立ち止まることを拒否する。カントが示したように、我々はそもそも絶対的真理とは何かを問うことはできない。そこで問い方の抜本的転換を図り、ジェイムズは、「それを信じることで我々に善をもたらすもの」を真理と呼ぶような新たな真理観を示した。これがまさに、プラグマティズムの「真理」観であった。

ジェイムズのプラグマティズムにおいて、真理は、永遠普遍の絶対者によって規定されるものではない。そもそも我々は、その普遍的真理の存在を論理的に証明することはできない。ゆえにジェイムズは、主知主義的立場を批判し、経験不可能な事柄の真偽を問うことを不毛なこととして唾棄した。ジェイムズにとっての真理とは、今・ここで「私」の経験の最中に発動するものである。「検証不可能などんな観念であれ、それを信じる人にとって「有益で」あり、「有用 (useful)」であり、「満足」をあたえる観念であるならば、その限りにおいてそれは真であることになる」[魚津 2006:145f]。

そして『PR』のひとつの核心は、これを思想的気質への着目を通して論じた点にあるといえる。後にユングが取り上げたのは、まさにこの点にはかならない。ジェイムズは、命題の真偽をめぐる思想的対立を「気質」的相違へと遡及し、対立の根本的解消を目論むのだ。

「哲学の歴史はその大部分が人間の気質の衝突 (clash of human temperaments) ともいうべきものの歴史である。[...] 私はこの衝突を重要なものと見なし、これによって哲学者たち相互の著しい差異を説明しようと思うのである。」[PR 12=11]

ジェイムズによれば、哲学の歴史は、合理論と経験論の対立の歴史と換言される。そして、そのどちらの立場をとるかは、多分にその人の根本的な気質によっているという。

合理論は、常に一元論的であり、全体と普遍から発し、事物の統一を重んずる。合理論は経験論よりも一層宗教的であり、ジェイムズはこれを、「軟い心」と呼ぶ。対して、経験論は、唯物論的であり、あくまで事実を重んずる。経験論者は、絶対者を認めず、常に部分から発する。ジェイムズはこれを、「硬い心」と呼んだ。そして「軟い心の人」の特徴として、合理論的 (「原理」に従う)・主知主義的・観念論的・楽観論的・宗教的・自由意志論的・一元論的・独断的という形容詞を、一方の「硬い心の人」には、経験論的 (「事実」に従う)・感覚論的・唯物論的・悲観論的・非宗教的・宿命論的・多元論的・懐疑的の形容詞を割り当てたのである [14=15]。

そして、この二項対立のどちらが真か、経験論と合理論、どちらを採用すべきかといった形而上学的問いは、理性で解決できる問いではない。ジェイムズは、問い方自体を変革することで、この問いを無化する。彼は哲学者の本来的「気質」の相違のうちに対立の根本原因を見た

のである。

(2) ユングのタイプ理論における『プラグマティズム』の受容

「ZF」および『タイプ論』における『プラグマティズム』へのユングの言及は、ジェイムズの議論の要約の域を越えて、そのまとめ方や解釈においてユング自身の独自性が現れている点で大変興味深いものである。「ZF」は論文自体の長さが短いこともあり、ジェイムズへの言及は6パラグラフにしか満たないが、『タイプ論』では、「現代哲学におけるタイプの問題」と題された第8章の全体が、ジェイムズによる類型の解説に当てられているのだ。ただし、『タイプ論』は「ZF」に比べ、ユング自身の類型論がより細分化・洗練されているために、ジェイムズの類型にやや飽き足らなさを表明する箇所も現れている。ここではさしあたり、特に両論文に通底する部分に着目し、まずは「ZF」の時点ですでに表明されていた、ユングのジェイムズ解釈を追うことにする。

ユングによれば、ジェイムズの「専門的哲学者というものは、どのような気質をもったものであっても、哲学するに当たっては、自己の気質という事実をつとめておし隠そうとする」[PR 12=1957:12]という「根本思想」は、「非常に精神分析的 (ganz psychoanalytisch)」なものである [ZF § 864]。ジェイムズの挙げた「軟い心の人」と「硬い心の人」という二つのタイプの差は、「リビドーという《魔力 (magischen Gewalt)》の力点の置き方の違いに由来する」というのである [§ 869]。

そこでユングは、これを《精神的な心の人 (Geistig-Gesinnnten)》と《物質的な心の人 (Stofflich-Gesinnnten)》とに意識することも可能であると述べ、ジェイムズの分類を「リビドーの流れる方向」によって解釈しなおす。前者が「自らのリビドーを思考的なものに向けており、主として内向的」であるのに対し、後者は「リビドーを感覚的な客体すなわち物質に向けている」という意味で「外向的」であるというのだ [§ 864]。

原理や思考体系を基準とする「軟い心の人」は、経験を自らの原理や信念、論理的推論の下位に置くため、「経験によって惑わされたり悩まされたりすることがない」。しかし、これが病的な段階に至ると、こうした哲学者はパラノイアとみなされる。なぜなら、世界を自らの信念に無理矢理に当てはめ、それと矛盾するあらゆる事実を無視して、すべてを都合の良いように自分の思考体系に従属させようとするからである。「軟い心の人」の特徴は、必然的に主知主義的・観念論的・楽観的・宗教的・非決定論的・一元論的・独断的といった性質に帰結され、これらは「ほとんどもっぱら思考的なものを中心に配列されている」[§ 865f]。一方、「硬い心の人」は経験的であり、事実に従って行動する。彼らは経験の変化に支配されているため、「原理はつねに事実よりも低い価値しか持たない」。それゆえ、その理論は内的矛盾に陥りやすく、たいていは経験的資料の山によってかき乱され圧倒されてしまう。還元的・感覚的・唯物論的・悲観的・非宗教的・決定論的・多元論的・懐疑的といった「硬い心の人」の性質は、神概念のような高邁なものさえも「…にすぎないもの」として低俗なものと同様に認識し、世界や物事の多様な様相やそれらの実際的な可能性を重視する傾向に基づいている [§ 867f]。

以上が、「ZF」におけるジェイムズの類型の大まかな解説である。ここに明らかなように、ユングは『プラグマティズム』におけるジェイムズの二類型をほとんど直接に受け取り、それを自らの外向・内向というリビドーの構えとしての二類型に結び付けて論じるのである。「ZF」の時点では、論文全体を通して、外向・内向の二分類が示されるにとどまるが、8年後の『タ

イプ論』ではそこにさらに、四つの心的機能、すなわち「思考 (Denken)」・「感情 (Fühlen)」・「感覚 (Empfinden)」・「直感 (Intuieren)」というユング独自の分類が組み合わせられることになる。そのため『タイプ論』においては、たとえば内向的なタイプの特質が、必ずしも思考型と一対一に対応するわけではなくなるなど、二つの類型だけで話を進めたジェイムズとの間に少しずつ差異が生じていく¹⁴⁾。ユングによれば、『プラグマティズム』は哲学的見解にのみ議論を絞っているため、そのような「枠にはめられた一面性は混乱を招きやすい」¹⁵⁾。「ジェイムズの表現はあまりに広く、全体で見てようやくタイプの対立のおおよそのイメージがつかめるにすぎず、さもないと単純な公式になりかねない」というのだ [PT § 538f]。

しかし、ジェイムズの分類のそうした不足を認めたとうえで、ユングは彼の功績を改めて評価する。ユングによれば、ジェイムズが扱った現代哲学における立場の対立は、『タイプ論』第1章で取り上げられた、中世における唯名論と実念論の対立のドラマになぞらえることができる。当時、その両者の統合を図ったアベラールの試みは「心理学的 (psychologisch) な視点が完全に欠けていたために」、あくまで論理的・主知主義的 (logisch-intellektualistisch) に偏ったものに過ぎなかった。ところが、ジェイムズは「気質の相違」に着目し、「この対立を心理学的に捉え、それに応じてプラグマティズムによる解決を図った」というのだ。もちろん、この「解決の価値に幻想を抱いてはいけない」が、「全体として、ジェイムズのタイプ論は、他の文献から得られたタイプのイメージを補足するものとして貴重なものである」[§ 539f]。こうして、ユングは思想上の対立に「心理学的な視点」を持ち込んだジェイムズのプラグマティズム哲学を高く評価するのだ。

(3) 「個人的方程式」

ユング自身が、ジェイムズの類型論について直接言及している内容は、概ね以上の通りである。『タイプ論』に至ると、ジェイムズに関する章は、既述の通り第八章目に位置づけられており、一見したところ、ユング自らの議論を確証するための一事例としての役割しか負っていないようにも見える。しかしながら、ユングは『タイプ論』の序章において、自らの目的は、学問上あるいは人間同士の関係上の対立を、タイプの原理という心理学的な視点で説明することにあると述べている [§ 4]。ユング自身が認めているように、その試みの先駆者は、紛れもなくジェイムズその人だったはずである。『PR』においてジェイムズは、単に思想の二項対立を示したわけではない。より重要な点は、その根底に横たわる、個人の気質によるパースペクティブの違い、現実の把握の仕方の「心理的」差異を指摘した点にあると言える。そもそもユングのタイプ理論は、この「心理的」差異の問題を徹底的に敷衍したものではなかったか¹⁶⁾。

ユングによれば、あらゆる学問的な理論形成や概念形成には、その提唱者の「主観的心理的な布置」が少なからぬ影響を与えている。ユングはこれを「心理的個人的方程式 (psychologische persönliche Gleichung)」¹⁷⁾と名づけた。「個人的方程式の作用は観察するときすでに始まっている」。人は、自分の位置から一番良く見えるものを見るものであるからだ。したがってユングは、「いわゆる客観的心理学における《純粹観察》という原理を信用しない」。心理学においては普遍的理解など存在せず、自らの主観的な観察の範疇内で、いかに対象の「現実」に対する妥当な説明が可能となるかが問題となる。「その限りで、自分の目の中の梁こそがまさに兄弟の目の中の塵を見つける力を与える」。ユングは、そこから帰結される、心理学者のとるべき態度について、次のように述べる。

「認識一般が、とりわけ心理学的認識が、主観によって制約されていることを承認し肝に銘じるといことは、観察主体とは異なる心を学問的に公正に評価するためのひとつの根本条件である。」〔§ 10=1987:17〕

客観的な真理を、まずは括弧に入れる。心理学的認識は、常に主観的な偏重によって構成されているのに気づくこと。これこそ、ジェイムズを経由し、ユングが引き受けたプラグマティズムであった〔§ 8-10〕。

そしてこの先に、ユングの独自性が展開する。上記の態度が満たされるためには、「観察者が自分自身の人格の範囲と性質に十分に精通している」ことが必要となる。それが「十分に精通できるのは、集合的判断という平均化する影響から高度に自由になり、それによって自分自身の個性を明確に理解するに至る場合だけである」というのだ。「集合性」への「同一性状態」から離れて、個的存在を形成し「特殊化」していくこと〔PT § 825-828〕。ユングの「個性化」論の着想の原点は、まさにこの点にあったといえる。

この思考法はまた、臨床家としてのユングのその後の理論形成に大きく影響していると考えられる。まずは、精神疾患に対する構えに関してである。1936年に出版された、タイプに関する論文の中で、ユングは次のように述べている。「神経症の本当の原因は […] 患者がいかに環境の及ぼす影響を受け取り、消化したかという固有の様式や方法の中にある」〔Jung 1971c: § 970〕。医師として患者に接すると、個々のあらゆる病像は、一つの医学的診断に押し込めることのできないような多様性を持っているのに気づく。それは一人一人の患者が、それぞれの環境をそれぞれの性格によっていかに受け取ったかに左右されるためである。よって、病気の問題の核心は、環境の処理システムのあり方にあるというのだ。現代の認知療法による主張とさえ一脈通じる発言とも受け取れるが、ここにもやはり、集合的判断を退け、個別性を重んじる姿勢が現われることになる。

そしてもちろん、患者を観察する医師自身の目にも、タイプ理論は適用される。同論文の終わりにユングは、以下のように述べている。

「最後になったが重要なことは、タイプ理論は、臨床心理学者が自らの分化機能と劣等機能を正しく知ることによって、患者について判断する際の多くの由々しき誤謬を回避できるように、自らの個人的方程式を見定めるための重要な手段にもなるのである。」〔§ 986〕

この考え方こそ、ユングによる心理療法論の一つの特質を表していると言える。顕著なのは、この前後より展開された彼の転移論である。フロイトの精神分析理論が、分析技法としての転移の重要性を評価しつつも、治療者から患者に対して起こる「逆転移」を極力避けようとしたのに対し、ユングは初期から一貫して¹⁸⁾、転移の重要性に注目するだけでなく、逆転移もまた治療には不可欠の要素であると考えていた¹⁹⁾。ユングにおいて転移はあくまで「相互的」なものであり、治療とは「医師と患者が全人的に関与した相互的影響の所産」を意味する〔Jung 1979a: § 163〕。よって、医師からの逆転移もまた、治療にとって重要な要素となる。ここで治療が正しく進むためには、患者のみならず医師自身の「傷口」、偏重が知られておくべきだというのだ〔Jung 1968:167〕。ユングが教育分析の必要を説いたのは、このために他ならない。治療においては、医師自身の「個性化」をも求められる。このための「補助」となるのが、タ

イブ理論だというのである [Jung 1971c: § 970]。

以上に見てきたように、ユング心理学の原点として『タイプ論』を見ると、そこにはジェイムズの『プラグマティズム』との深いつながりを見出すことができる。「個人的方程式」の概念は、多分にプラグマティックな要素を有しており、ユングの「個性化」論のある一面を大きく照らし出す。それは、個々の「多様性」を損なうことなく、その特有の「個別性」を意識化していく過程として表現されるものであった。

4. おわりに — 個性化論再考に向けて

ユングは、『タイプ論』当時のことを、後に自ら回想しながら次のようなことを述べている。「タイプについての本は、人間のなすいかなる判断もその人のタイプに制限されており、いかなる観点も相対的なものであるという認識をもたらした。その結果、こうした多様性 (Vielheit) を補償する統一性 (Einheit) への問いが頭をもたげたのである。」[ER 211]

個の「多様性」が突き詰められたとき、そこにはその帰結として相対主義が待ち構えている。今度はこれを補償する「統一性」を、ユングは求めるようになったというのだ。

実は、『タイプ論』のジェイムズについての章の終わりに、ユングはジェイムズのプラグマティズム哲学の「不十分な」点に対し、僅かながら重要な指摘を行なっている。

「対立する二者の葛藤は、概念論におけるような論理的・主知主義的妥協案によっても、プラグマティズムのように論理的に相いれない双方の見解の実際の価値を実用主義的に比較することによっても解決できない。それができるのは対立する両者を対等の必要要素として受け容れる積極的な創造ないし行為だけである。[...] それゆえプラグマティズムは偏見を取り除くことによって創造的行為に道を開く移行期の構えでしかありえない。」[PT § 541=344]

『タイプ論』当時のユングは、ジェイムズのプラグマティズムが、一つの方向に偏った見方に対して、その対立概念を提示することによって「偏見を取り除く」に留まり、それらを統合せんとするダイナミックな行為にまでは到達しえなかった、と解釈していたようである。そして、ここでユングが唯一の解決策として提示する、「対立する両者を対等の必要要素として受け容れる積極的な創造ないし行為」こそ、まさに再び「個性化」の過程にほかならない。『タイプ論』に萌芽を持つもう一つのモチーフは、「対立物の結合」としての「個性化」である。人は自らの生きられていない側面を認識し、その要素との対話を図らねばならない。その認識のための一つの手段がタイプ理論だったのだ。相反する二つのタイプに端を発した「対立物」の概念は、『タイプ論』以降、時には意識と無意識、男性性と女性性などと様々に言い換えられていくが、ユングはそうした要素間のダイナミックな統合の過程を、彼の人間形成論の中心に据えたのである。

ユングが指摘するように、『プラグマティズム』でとりわけ強調されたのは、各人各様の価値、「多元性」の重要性であった。われわれが各々の気質にしたがって世界を捉えるかぎり、あらゆる信念上の対立は、あくまで「個人的方程式」の範疇の問題となる。その考えにおいては、

あたかも、個々人の内閉した世界が無限に並列されるばかりで、それら相互の間につながりもなければ対話もなく、それぞれの世界の内側に何らかの変化が起こることなど期待することはできないかのようなのである。ユングが感じた物足りなさは、この点にあったといえよう²⁰⁾。

本論では、紙幅の都合上、『タイプ論』に現れた「個人的方程式」の概念とジェイムズのプラグマティズム哲学の連関を示すにとどまったが、両者の差異や、そこを超え出て行こうとしたユングの思想的展開については、さらなる検討を要する重要な問題であるといえる。この検討を今後の課題として提出しつつ、本稿を閉じることとする。

注

- 1) 本論文において、翻訳を参照した場合、原著の後に＝で区切って翻訳の発行年と該当頁数を表記した。なお、直前の引用箇所と同じ文献を用いる場合は、頁数のみ示し、出版年等は省略することとする。ただし、ユングとジェイムズの主要論文については、文献表に示した略記を著者名、発行年の代わりに用いている。
- 2) 本稿では紙幅の都合上扱うことができないが、シャムダサーニの『自伝』に関する発見については、ユング思想を新たな角度から捉え直すにあたって、大変重要な視座を多く持っている。この詳細な検討には別稿を用意している。なお、シャムダサーニのほか、第二節に挙げるアメリカの心理学史家 E. テイラーが、それぞれユングとジェイムズの接点について歴史的な観点から着目し、そこから思想的連関の可能性を示唆しているものの、残念ながら実際の具体的検討にまで立ち入ることはない。本稿は、ユング初期の『タイプ論』に着目することで、ユングとジェイムズに潜在する思想的な接点を考察しようとするものである。
- 3) テイラーはこの日のことを次のように表現している。「こうしてその夜、類まれな経歴を終えようとしていたジェイムズと、まだ初まったばかりのユングという、二つの大きな帆船がすれ違った」[Taylor 1980:161]。
- 4) たとえば、ジェイムズは友人フルールノワに向かって、フロイトには「固定観念に取り付かれた男」という印象を持ったのに対し、ユングに「大変気持ちのよい印象を受けた」と書き綴っている [James 1920:327]。
- 5) ユングの参照している『プラグマティズム』は1911年の英語版 (*Pragmatism: A New Name for Some Oldways of Thinking*, London und New York, 1911) である。
- 6) この時期、ユングは「自己実験」と称して、体験した数々のヴィジョンに自らを預け、それらを詳細に記録していた。その内容は、シャムダサーニの編集で『赤の書 (The Red Book)』として2009年になって初刊行された。
- 7) 印刷物としては10ページあまりの小論ではあるものの、『タイプ論』の基本的発想が、すでに本論において示唆されているのは明らかと言える。
- 8) カイザーリンクが、*La Révolution mondiale* において、アメリカのプラグマティズムを「根っから非宗教的」なものと「烙印を押している」のに対し、ユングは「彼がウィリアム・ジェイムズのことは指していないといいのだが！」と述べている。[Jung 1974: § 942]
- 9) ジェイムズと、彼より3歳年長のパースは、大学の学友であり、青年時代から晩年まで友好関係が続いた。世渡り下手で人好きのしないパースをジェイムズはいつも気にかけ、才能に溢れながら学界にポストのないパースのために、大学の仕事を回そうと奮闘したことも多々あったという [Simon 1998:147ff]。
- 10) この講演は「哲学の概念と実際の結果 (Philosophical Conceptions and Practical Results)」と題され、1904年に哲学雑誌に掲載された [James 1975]。
- 11) パースは、「プラグマティズムとは何か」(1905)において、流布するようになった「プラグマティズム」と自分の立場を区別して「プラグマティシズム」なる概念を新たに提唱する。「他のプラグマティストたちの書いた書物を精読することによって、わたしは大いに啓発されたけれども、なおわたしが最初にいただいたプラグマティズムの概念が、決定的な優位性をもちつづ

- けていることをわたしは確信する。」[Peirce 1934:277=1968:225f]
- 12) [Perry 1935: ii 406-440] および [鶴見 1971:22-48] を参照のこと。
- 13) 1906 年 11 月から 12 月にかけてのボストンのロウエル学会、および 1907 年 1 月のニューヨーク、コロンビア大学での講義。講義で述べたとおりに印刷されており、加筆・修正はなされていないという [PR 9]。
- 14) 『タイプ論』序論において、ユングはこの点について以下のように述べている。「私はここで分類したこの区別を以前に発表した心理的タイプに関する二つの報告においては明確にすることができず、思考型と内向型とを、また感情型と外向型とを同一視してしまった。問題をさらに深く考察してみると、この混同は支持できないことが明らかとなった」[PT §7=1987:13]。原注によれば、上の「二つの報告」とは、「ZF」と『無意識の心理学』(GW7)を指している。
- 15) 「たとえば独断的、宗教的、観念論的、主知主義的、合理主義的な経験主義者もいれば、その反対に唯物論的、悲観的、決定論的、非宗教的な理念主義者もいる」[PT §538]。
- 16) もちろん、パースペクティブの問題は、この同時代においてジェイムズばかりが提唱したものではない。キリスト教道徳の盲目的受容を拒否し（そこにはカント、ルター批判が含まれる）、伝統的道德性を唾棄して、遠近法主義を説いた、ニーチェの『善悪の彼岸』は有名である。ただし、シャムダサーニによれば、「ユングがニーチェを熱心に読んでいたのに対し、ジェイムズがニーチェの仕事を取り上げることはなかった」という [Shamdasani 2003:59]。
- 17) "Gleichung" は「等しいこと」「等式」などの意味をもつ。"persönliche Gleichung" は邦訳『タイプ論』で「個人的誤差」と訳されているが、本論では邦訳『赤の書』[Jung 2009:197=2010:200] を参照し、各個人の世界受容の形式の演算として「個人的方程式」と訳出した。なお、この術語は『タイプ論』で初めて用いられた [林 1987:628]。
- 18) 『転移の心理学』(1946) の分析を通して、他者との関係の中での「個性化」の展開を明らかにする試みを別稿にて行なっている [小木曾 2007]。
- 19) ユング自身が述べているように、このことは両者の面接技法の違いに表れている。フロイトが患者を寝椅子に寝かせ、治療者はその背後に座り、姿を見せずに分析を進めたのに対し、ユングは初めから患者と対面して座り、面接を行った [Jung 1979b: § 358, Anm.16]。
- 20) しかし、ジェイムズの言葉に再度目を向けると、この理解は少々一面的ともとれる。というのも、彼は決して、対立する二者を静的なものと捉えていたわけではないからだ。ジェイムズは『PR』において、ひとつの観念の真理とは「その観念に内属する動かぬ性質などではなく」、人間の行為や出来事によって「真理化 (verification)」されるものと述べる [PR 87]。そこには、個々人の採用するひとつの「真理」が、絶えず検証されることによって、不断に編み直されていく動的な過程が含まれていたはずである。にもかかわらず、『タイプ論』においては、ジェイムズ哲学におけるそうしたダイナミズムが、残念ながら最後まで俎上にあがることはなかったのである。

参考文献

- 林道義 1987: 「解説」『タイプ論』みすず書房。
- 林道義 1998: 『ユング——自己実現と救いの心理学』河出書房新社。
- Homans, P. 1979: *Jung in Context: Modernity and the Making of a Psychology*, The University of Chicago=1986: 村本詔司訳『ユングと脱近代——心理学人間の誕生』人文書院。
- James, W. 1920: *The letters of William James*, Henry James(ed.), London :Longmans, Green.
- James, W. 1975(1898): "Philosophical Conceptions and Practical Results", in *Pragmatism*, Cambridge : Harvard University Press.
- James, W. 2008(1907) [PR]: *Pragmatism: A New Name for Some Old Ways of Thinking*, ARC Manor: Rockville, Maryland =1957: 榊田啓三郎訳『プラグマティズム』岩波書店。
- Jung, C.G. 1960(1914): "Der Inhalt der Psychose", in *Gesammelte Werke Bd.3*, Olten : Walter-Verlag .

- Jung,C.G. 1961(1913):"Versuch einer Darstellung der psychoanalytischen Theorie",in *Gesammelte Werke Bd.4*, Olten : Walter-Verlag.
- Jung,C.G. 1967(1937): "Psychologische Determinanten des menschlichen Verhaltens",in *Gesammelte Werke Bd.8*, Olten : Walter-Verlag.
- Jung,C.G. 1968(1935): *Analytical Psychology : Its Theory and Practice . The Tavistock Lectures*, London : Routledge & Kegan Paul Ltd.
- Jung,C.G. 1971a(1913) [ZF]:"Zur Frage der Psychologischen Typen",in *Gesammelte Werke Bd.6*, Olten : Walter-Verlag =1987:林道義訳「心理的諸タイプの問題について」『タイプ論』みすず書房.
- Jung,C.G. 1971b(1921) [PT]:"Psychologische Typen",in *Gesammelte Werke Bd.6*, Olten : Walter-Verlag =1987:林道義訳『タイプ論』みすず書房.
- Jung,C.G. 1971c(1936):"Psychologie Typologie", in *Gesammelte Werke Bd.6*, Olten : Walter-Verlag =1987:林道義訳「心理学的タイプ論」『タイプ論』みすず書房.
- Jung,C.G. 1971d(1962) [ER]: *Erinnerungen, Träume, Gedanken*, Olten : Walter-Verlag=1972-73: 河合隼雄・藤縄昭・出井淑子訳『ユング自伝——思い出、夢、思想』1・2,みすず書房.
- Jung,C.G. 1972: *Briefe*, zweiter Band 1946-1955, herausgegeben von Aniela Jaffé, Olten : Walter-Verlag.
- Jung,C.G. 1973: *Briefe*, dritter Band 1956-1961, herausgegeben von Aniela Jaffé, Olten : Walter-Verlag.
- Jung,C.G. 1974:"Ein neues Buch von Keyserlink 'La Révolution mondiale et la responsabilité de l'esprit'", in *Gesammelte Werke Bd.10*, Olten : Walter-Verlag.
- Jung,C.G. 1979a(1929): "Die Probleme der modernen Psychotherapie",in *Gesammelte Werke Bd.16*, Olten : Walter-Verlag.
- Jung,C.G. 1979b (1946) : "Die Psychologie der Übertragung", in *Gesammelte Werke Bd.16*, Olten:Walter-Verlag = 1994: 林道義・磯上恵子 訳『転移の心理学』みすず書房.
- Jung,C.G. 2009: *The red book : Liber novus*, Sonu Shamdasani (ed.), W.W. Norton=2010: 河合俊雄監訳『赤の書』創元社.
- 小木曾由佳 2007:「C.G.ユング「個性化」論における他者性の問題—ユングの転移論による検討」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第47号.
- Peirce,C.S. 1934: Pragmatism and Pragmaticism,in *Collected papers of Charles Sanders Peirce Vol.5*, Charles Hartshorne and Paul Weiss (ed.),Cambridge:Harvard University Press =1968:上山春平・山下正男訳『世界の名著48 パース・ジェイムズ・デューイ』中央公論社.
- Perry,R.B. 1935: *The thought and character of William James : as revealed in unpublished correspondence and notes, together with his published writings*,v1,v2, Boston : Little, Brown.
- Shamdasani,S. 1995:"Memories,Dreams,Omissions",in *Spring 57*, Dallas : Spring Publications.
- Shamdasani,S. 2003: *Jung and the Making of Modern Psychology*, Cambridge University Press.
- Simon,L. 1998: *Genuine reality : a life of William James*, New York : Harcourt Brace.
- Taylor,E. 1980: "William James and C.G.Jung", ,in *Spring 20*, Dallas : Spring Publications.
- 鶴見俊輔 1971:『アメリカ哲学——プラグマティズムをどう解釈し発展させるか』社会思想社.
- 魚津郁夫 2006:『プラグマティズムの思想』筑摩書房.

本研究は平成 22 年度日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費）の助成を受けたものである。

（日本学術振興会特別研究員 心理臨床学講座 博士後期課程 1 回生）
（受稿2010年9月6日、改稿2010年11月26日、受理2010年12月9日）

Jung's Typology and Pragmatism: “Personal Equation” as a Pragmatic Way of Thinking

OGISO Yuka

The life and theory of Carl Gustav Jung have been interpreted from the "Freudcentric" view, because of the uncritical acceptance of his autobiography. In recent years, Sonu Shamdasani has discovered some omissions from its manuscript, and the relationships between Jung and essential people other than Freud have been revealed. One of the most important persons is William James, the American philosopher of pragmatism. Jung had met James only once, but he confessed that he had always regarded James as his "model." In this paper, we focus on the early works of Jung, especially his typology, and make it clear the closeness of these works with James' pragmatism in giving consideration to Jung's idea of "personal equation," which later characterizes his views on treatment, such as counter-transference.